

法学系科目の授業改善と 学生参加型授業参観プロジェクト

Improvement of Legal Lectures by Using Students' Voices

吉 田 雅 章

Masaaki YOSHIDA

はじめに

18才人口の大幅な減少と大学ユニバーサル化の中、ゆとり教育世代が4年制大学在学生の大半を占めるようになり、大学生の学力低下が大問題となっている。これに対処するため、各大学は教育の充実に取り組んでおり、FD（ファカルティ・ディベロップメント）もその一翼をなすものである。そして、授業改善のために、教員相互の授業評価や研修会・講演会などの開催、教育方法改善のためのセンターの設置、公開授業とその検討会の開催など、さまざまなFD活動が数多くの大学で実施されている。また、文部科学省は法的にFDを実施すべきものと制度化するようになり、平成19年度から大学院でFDが義務化され⁽¹⁾、平成20年度から学部でもFDが義務化された⁽²⁾。このような状況下、筆者は平成10年3月より、和歌山大学においてFD（ファカルティ・ディベロップメント）活動に取り組んできた。大学生生き残りのた

（1）平成18年5月31日付の文部科学省高等教育局大学振興課の資料「大学における教育内容等の改革状況について」（速報版）によれば、平成16年度の数値ではあるが、534大学（約75%）がFDを実施している。学生による授業評価に関しては、691大学（約97%）が実施している。

（2）http://202.232.86.81/b_menu/hakusho/nc/06060731.htmによれば、学校教育法施行規則等の一部を改正する省令（平成18年文部科学省令第11号）における大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）の一部改正の中で、「（6）教育内容の改善のための組織的な研修等」は、「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとしたこと。（第14条の3関係）」と明記されている。

（3）http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103.htmによれば、大学設置基準等の一部を改正する省令（平成19年文部科学省令第22号）における大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）の一部改正の中で、「⑥教育内容等の改善のための組織的な研修等」は、「大学は、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。こと。（第25条の3関係）」と明記されている。さらに、留意事項の第7項目として、「大学設置基準第25条の3の規定によるいわゆるファカルティ・ディベロップメント（FD）については、これまで努力義務であったものを義務化するものであるが、これは大学の各教員に対し義務付けるものではなく、各大学が組織的に実施することを義務付けるものであること。これを踏まえ、各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれること。」とも記載されている。

めに教育改善・授業改善は不可欠であって、今まで以上に、熱意を持って自己改革に取り組む必要があると考えられ、近年、FDは大学改革の中で極めて大きくクローズアップされてきている。

そして、上記のFD活動を通して、授業改善の具体的な取り組みとしては、学生による授業評価よりも、公開授業とその検討会ならびに授業参観プロジェクトなどが有効であると考えた。すなわち、FDといえば学生による授業評価を実施することであるとみなされる傾向も強かったが、上述したように、近年では公開授業実施に踏み切る大学が多く、授業改善に対する効果が強く認識されるようになってきている。

従来はFDといえば学生による授業評価のことだけを指す時期があったと言っても過言ではなかった。また、大学の外部評価（第三者評価）においては必ずといってよいほど学生による授業評価を実施することが要求される。しかし、果たして学生による授業評価は一般に期待されているほど授業改善に有効なのであろうか。もし、毎回、実施できれば授業の振り返りに非常に有意義であると思う。また、全く授業改善に取り組まない教員に対する「威嚇の効果（尻叩き効果）」は存在すると思われる。しかしながら、率直に言って、1年か半年に1回の学生による授業評価が授業改善にどれほどの効果があるのか、極めて疑問であると考えざるを得ない。すなわち、学生による授業評価は、その多くが半期に1度だけ、それも大抵は学期末に実施し、事務処理等のためにかかる一定時間経過後、やっと、その結果が返送されるというのが通常であり、フィードバックしても当該授業を受けてアンケートの回答をしてくれた受講生に対する反射的效果が実質的に得られない。

それに対して、公開授業を実施し、その直後に検討会を開催すれば、授業改善の即効性ははるかに大きい。公開授業とその検討会は他の教員に講義を参観してもらい、当該講義終了直後に検討会を開催して意見交換するのが通常であるが、時間と労力の問題を除けば、当該講義の振り返りにとって極めて有益であり、参加教員にとっても他の教員の授業テクニックを盗み取る絶好の機会でもある。これが和歌山大学における10年以上のFDに関する実践的活動を通して自分なりに下した結論である。ただし、残念ながら、その労力や時間、その他諸事情のために、参加者が増えないという点に問題がある。この弊害に対処すべく提唱するのが学生参加型授業参観プロジェクト⁽⁴⁾である。

本稿においては、単発的に教員が授業を参観して、その終了直後に検討会を実施する取り組みを公開授業とその検討会と定義し、他方、講義者以外の教員または学生が継続的に授業

(4) 授業参観プロジェクトという名称は、旧・京都大学高等教育教授システム開発センター（現在は京都大学高等教育研究開発推進センター）の授業参加観察プロジェクト担当チームで実践されていた活動に基づくものである。本稿においては同センターの活動を教員参加型授業参観プロジェクトと位置づける。同センターの活動の詳細は、京都大学高等教育叢書11『大学授業の参加観察プロジェクト報告（1）－大学授業の参加観察からFDへー』（平成13年）および京都大学高等教育叢書14『大学授業の参加観察プロジェクト報告（2）－大学授業の参加観察からFDへー』（平成14年）を参照。

を参観し、講義者が運営するホームページ上の掲示板と電子メールなどで授業に対する意見や感想の遣り取りをする取り組みを授業参観プロジェクトと定義する。そして、授業改善を図るにあたり、上述したように、公開授業とその検討会は極めて効果的であるが、具体的な運用面・実践に当たっての可能性・難易度等を考慮すれば、授業改善に取り組むに当たって学生参加型の授業参観プロジェクトがもたらす効果ならびに可能性は公開授業とその検討会に勝るとも劣らないものであると考える。というのは、受講生の中に当該授業に取り組む意欲の非常に強い学生がいる場合、その学生の意見を聞くことは授業改善に非常に有効であり、かつ実現可能性が大きいといえるからである。毎回当該授業を熱心に聴講している学生の場合には、単発的にしか受講できない大学教員よりも、当該授業に対する観察力は鋭いと言えるかもしれないのであって、FD（授業改善）を進めていくためには、教員側の授業改善に関する努力・工夫と、受け手である学生側の授業改善に関する関心、意欲の調達、態度の向上という双方からのアプローチが必要かつ不可欠である。

また、結論を先取りすることになるが、学生参加型授業参観プロジェクトの意義として次のようなことが考えられる。第1に、学ぶ側の学習意欲向上が教える側にも変化を及ぼす可能性がある。従来のFDにおける常識「大学教員だけが授業改善に努める」というのに比較し、教員と学生とが一体になって授業改善に取り組む姿は理想的な大学像を目指すものであるといえる。また、授業料を払っている学生、場合によっては保護者に対する説明責任を果たすことにもなりうる。近年高まってきている大学教育の享受者のコスト意識に対する回答であるといえる。第2に、学生参加による大学教育の改善を図るものであるから、大学としての教育・授業の質的向上につながり、授業参観プロジェクトに参加していない一般学生の学びの充実にまで寄与するものである。さらに、近年積極性の乏しくなってきた大学生の学びに対する意欲を喚起することにもつながることが期待される。第3に、学生参加型授業参観プロジェクトは学生参画型教育改善の一部を形成するものであり、学生にすべてを任せてしまうという性格のものではなく、学生と教職員とが一緒になって教育改善・授業改善を議論し推進しようとするものである。負担からすれば、教員だけで検討を進めるよりはるかに労力とエネルギーを必要とするものであり、決して大学の責任回避・責任軽減にはつながらないのではあるが、いち早くこのことに気づき積極的に取り組むことは高く評価すべきである。また、時代の流れから考慮しても、学生のニーズを適切に受け止めることは、消費者主権という考え方からも当然のことであり、今こそ学生参加・参画型FDを真剣に考えるべきだと思われる。第4に、教員集団だけで教育改善が行き詰まりを見せている現実、大学関係者なら誰でも感じていることであり、今さら、FDのような教員側の問題に学生が口を挟む必要があるのか、また学生にその能力があるのかという疑念やFDの理想論、教員の社会的責任論などを振りかざしても全く説得力はないのであって、むしろ、学生の積極性が授業自体を変革することにつながり、ひいては大学教育をより良い方向に導くのだという意識を持つことは

極めて重要なことである。大学の構成員全体が深い関心を寄せる形での授業改善は、大学という組織としての教育改善をより一層推進しやすい方向へ導いてくれるものである。

以下においては、第1に特定の学生による授業参観プロジェクトを実践した平成16年度から18年度にかけての民法における授業改善、第2に講義の最後に全受講学生による授業参観プロジェクトを実施した「論理トレーニングと法的思考」という法学教養科目における授業改善、第3に不特定多数の学生による授業参観プロジェクトを実践した平成21年度の民法における授業改善について論ずる。

1 平成16～18年度の民法における授業改善－特定学生による授業参観プロジェクト

平成16年度は前期に民法〔債権総論〕で、後期に民法〔債権各論〕で、それぞれ学生参加型授業参観プロジェクト⁽⁵⁾を実践した。平成17年度は前期に民法〔総則〕と民法〔債権総論〕で、後期に民法〔物権〕と民法〔債権各論〕という合計4科目で学生参加型授業参観プロジェクト⁽⁶⁾を実践した。平成18年度は前期に民法〔債権総論〕と民法〔親族・相続〕で、後期に民法〔総則〕という合計3科目で学生参加型授業参観プロジェクト⁽⁷⁾を実践した。この3年間はほぼ同じパターンで実施しており、事前に依頼しておいた特定の学生から意見や感想をメールで送ってもらうという形態で行ったが、詳細は次の通りである。筆者が作成したネット上の「吉田雅章のホームページ」(<http://www.jtw.zaq.ne.jp/cfajg005/index.htm>)にリンクさせた「ティーカップ」の無料掲示板(<http://6619.teacup.com/fdyoshida/bbs>)に、講義終了後、簡単に講義を概観し、受講学生へのメッセージとする。それを見たモニター学生が電子メールで講義者である筆者に対して意見や感想を伝えるというものである。なお、その際、受講登録している学生であるだけに、講義者に対して迎合的になると思われるので、再三にわたり、感じたことを率直に述べて構わないのであって、決して遠慮しないように訴え続けた。しかし、何回もメールのやり取りをしてゆくうちに、どうしても迎合的になってしまうように感じられた。ただし、必ずしもそうではない一例として、平成18年前期開講の科目の中で次のような感想を記載する。

「今回、少々の遅刻や、途中の出入りが目立っておりましたが、約100人の学生が受講していたようです。例年通り、民法は人気があり、たくさんの受講生がいるようです。先生の初学者に優しく、様々な将来の進路にあわせての講義は、人気が出る代表的な要因だと思います。今回は、前回に引き続き、親族・相続の導入ということで、民法全体を概観し関連する

(5) 講義者と受講学生との詳細なやり取りに関しては「平成16年度和歌山大学UD (FD) 報告書」(2005年)140頁～169頁を参照。

(6) 講義者と受講学生との詳細なやり取りに関しては「平成17年度和歌山大学UD (FD) 報告書」(2006年)109頁～149頁を参照。

(7) 講義者と受講学生との詳細なやり取りに関しては「平成18年度和歌山大学UD (FD) 報告書」(2008年)131頁～162頁を参照。

範囲を関係づけながら解説するといった講義でした。前回は民法総則の範囲を講義され、今回は物権及び債権の範囲でした。今回から、先生が問題を出し、学生が答えていくという形をとられました。昨年度の講義でも、少し学生を当て、答えさせるということは行われていましたが、今回より、マイクを渡し、順番に当てていくという形式でした。講義が先生からの一方通行ではなく、双方向からの進行で、活気が出ていました。先生が意図していた以上に効果があったと思います。講義終了後、学生が、『次からもっと前列に座ろう』と思っていたようで、授業に臨む姿勢も以前よりさらにいいものへと変わっていきそうです。さらに、講義に出て、ただ座ってノートをとるだけでなく、考えるという姿勢も広がっていくと思います。私が個人的に、当てられていた学生の回答を聞いていると、今回から小テストを行ったほうがよいのでは、と思いました。民法を受講したことがある学生が数人当たっていて、答えられていなかったようなので、全体の現在の習熟度を見られるという点で必要だったのでは、と感じました。講義の内容は、先生の配慮が随所に感じられる充実した講義でした。しかし、物権の地役権の説明が若干長く感じました。もう少し簡略化されてもよかったのでは、と感じました。』受講学生だからといって、単に迎合する意見や感想だけではない。

さらなる問題としては、誰にモニターを依頼するかであり、毎年容易に適任者が見つかるとは限らない。かかる障害は存在するが、それを克服さえできれば、学生参加型授業参観プロジェクトは、公開授業とその検討会のような単発的に講義を参観した教員による授業への参加や観察という作業ではなく、毎回受講している学生と講義者との双方向的な意見交換であり、FD活動として目新しい取り組みの一つであると見なすことができよう。

平成16年度から18年度にかけての学生参加型授業参観プロジェクトの分析として、平成18年9月9日（土）に岡山大学の学生・教職員教育改善委員会が主催した第3回教育改善学生交流シンポジウム・ワークショップ⁽⁸⁾ i* See2006において、筆者が担当する民法の受講生で学生モニターとなってくれた和歌山大学経済学部の4年生が報告し、これに対する岡山大学やその他の大学の学生や教職員から種々の意見や感想が出されており、傾聴すべきものと考ええる。まず、教育改善に関する一般的なこととして、① 教員が学生からの意見に対する反応の場を設けることが重要であり、② 教員と学生が交流する場を設置することが望ましく、③ 最近流行のオムニバス形式の授業では最後の1回に関してだけアンケートがなされることが多く、④ マーク形式での授業評価だけでは学生の声が不明確ではないかなどの意見が出された。次に、学生参加型授業参観プロジェクトに限定しての意見としては、電子メールによる意見交換の利点、すなわち、毎回の授業時に教員と交流することにより常に学生の意見が授業に反映されることが着目された。また、受講登録をしていない学生に授業参観プロジェクトに加わってもらい、さらなる授業改善が望めるのではないかという提言がなされた。これ

(8) 岡山大学教育開発センターに関しては、<http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/> を参照。第3回教育改善学生交流シンポジウム・ワークショップに関しては、<http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/wg/iSee2006/> 参照。

は、単位を既に修得した学生が、以前に自分が履修した講義に対して改めて意見を述べることであり、厳正・中立な立場で意見が言え、現在履修中の学生に比べて言いやすいということに基づくものである。ただ、そのような奇妙な学部生が果たして存在するのかという問題がある。もし特別な予算があれば、当該科目を学部生当時に履修した大学院生に謝金を支払って、授業参観モニターをしてもらうのが最適であると思われる。さらに、「意見交換カード」という提案が出された。これは、① 学籍番号と名前を記入して、② 毎授業の終了時に提出し、③ 次の授業時に教員がコメント付きで返却するというものであり、それゆえに、④ 学籍番号や名前の記入で匿名性は喪失するが、⑤ 教員が学生個々の考えや問題・疑問などを把握しやすくなるという利点があり、⑥ 如何なる意見を書かれても教員はそれに対する評価を与えることにより学生に利益をもたらせば、教員・学生相互に有益であると報告された。しかし、一人で複数枚書く不心得な学生が出現する可能性があり、もう少し時間をかけることが可能であれば（学生に書かせる時間と教員がそれを見る時間）、その日の授業内容をまとめよという小テストを実施する方が知識の定着に有効であり、教育上、はるかに効果的ではないかと思われる。

2 法学系教養科目における授業改善－全受講学生による授業参観プロジェクト

平成20年度前期に法学系教養科目である「論理トレーニングと法的思考」を開講し、一般的に難解であると考えられている法律を、映画やTVドラマなどを利用して、具体的かつ理解しやすくなるように工夫した。この講義においては特定学生による授業参観プロジェクトではなく、全受講生による授業参観プロジェクトを実施した。ただし、受講生にFD活動としての学生参加型授業参観プロジェクトであることを明言せずに、講義の最後にレポートや感想を出してもらうという言い方をした。

また、当該科目は学生リクエスト科目という位置づけでもあり、それは次のような経緯によるものである。すなわち、平成18年12月21日に学生参画型FDプロジェクトとしての「あったらいいな！こんな授業」というイベント⁽⁹⁾を開催した。その内容は、学生が受けてみたいと感じる授業を提案してもらい、もし可能であれば翌年度、その授業を実現してみようというもので、教養科目として「こんな授業があったら受けてみたいな」というものを募集し、パワーポイントを使って、講義のタイトルや授業の目的・狙い、14回に及ぶ授業計画などを聴衆の前で説明してもらい、イベントの最後に、会場にいる全員で投票を行い、発表作の中の最優秀賞を決定し、大学がこれを表彰し、翌年度に実施することができると否か議論し、もし可能であれば全学共通科目として開設することも計画するというものであった。こ

(9) 和歌山大学における学生参画型FDの実施については、拙稿「学生参画型FDイベント『あったらいいな！こんな授業』の開催」第14回大学教育研究フォーラム発表論文集（2008年）78・79頁

(http://www.higheedu.kyoto-u.ac.jp/edunet/archive_pdf/08.p078.yosi.pdf) 参照。

のイベントに対して、全部で18組の応募があり、4会場に分かれて予選を実施し、それぞれで勝ち残った4グループで再度競い合ってもらい、経済学部3年生2名が発表した「大学生のための論理トレーニング」が最優秀賞に選出された。そして、平成19年度に開講するには時間的問題があったので、平成20年度に前述の「大学生のための論理トレーニング」を具体化した講義として「論理トレーニングと法的思考」を開講することになった。

当該科目は平成20年度前期に開講し、水曜5限（16時30分～18時00分）の教養科目（学生リクエスト科目）で2単位ものとした。シラバスに記載した「授業のねらい・概要・科目の位置付け」は、「平成18年12月に開催された第1回『あったらいいな！こんな授業』における優勝発表『大学生のための論理トレーニング』を具体化した授業で、前半では、論理的な思考と物事に対する批判的な目を育てる予定。あらゆる情報があふれる現代社会では正しく情報を見極めることが重要であり、自ら考えて論証をする能力を養い、それを土台として法的思考に結実させてもらおうと考えている。また、実際の判例を取り上げて、法的なものの考え方に慣れてもらおうという意図もある」であった。暫定的な授業計画は、「第1回・オリエンテーション、第2回・実際のイベントの録画を視聴して受講生と話し合いの上で以後の授業計画を修正、第3回・論理力と思考力、第4回・論理と演繹、第5回・概念分析、第6回・さまざまな接続関係、第7回・議論の組み立て、第8回・論証の構造と評価、第9回・演繹と推測、第10回・価値評価、第11回～第14回・論理を法的判断に応用する」であった。また、到達目標・成績評価の方法に関しては、「到達目標は、自ら考えて論証をする能力を養い、それを土台として法的思考に結実してもらうこととした。成績評価は、期末試験50%、出席点50%」というものであった。履修上の注意・メッセージは、「毎回、定刻に出席してほしい。上記の授業計画は暫定的なものにすぎず、第2回で受講生と話し合った上で授業計画を練り直す予定」と明記した。

そして、受講登録者数は、観光学部はゼロで、教育学部が1名、経済学部が15名、システム工学部が56名の合計72名であった。各学部の卒業に必要な単位数や必修科目および時間割の都合などにより受講生が偏在したものと推測する。なお、最終的に単位を認定した学生数は63であった。第1回は、出席学生が約50名で、シラバス記載の抽象的な授業計画とは異なり、法律に関係する様々なドラマや映画を視聴した上で、法的論理に習熟してもらうことが目標であることを説明し、その点に関して受講生の了解を得た。特に山崎豊子原作の『白い巨塔』を考察の中心とし、医療過誤事件における患者と医師およびそれぞれの弁護士が展開する論理を分析することが大部分を占めると明言した。その次から第8回までは、2003年から2004年にかけてフジテレビで放映された唐沢寿明主演のドラマ「白い巨塔」の録画を教材として利用し、原告側（医療過誤事件の患者・被害者）と被告側（医師）の双方が主張する論理を分析させ、ほぼ毎回小テストを実施した。なお、第6回では駆け出しの弁護士を追跡するNHKの番組も挿んだ。第9回は、あえて刑事事件を取り上げて、痴漢冤罪事件を選択

した。その具体例として、周防正行監督の映画「それでもボクはやってない」を見せ、時間的な都合のため、レポートをメールで提出することとした。第10回から第14回は、1978年から31回に渡りフジテレビで放映された田宮二郎主演のドラマ「白い巨塔」を見せ、唐沢寿明主演のものとの違いを認識させ、その相異を中心に毎回、小テストを実施した。全体を通して受講学生の出席状況は良好であったので、定期試験は実施せず、2種類のレポートを提出させることとした。前述のように受講生には明言しなかったが、これらのレポート提出が全受講生による授業参観プロジェクトであった。

紙幅の都合上、1件だけ、映画「それでもボクはやってない」を視聴しての感想の一部分を紹介する。ネット上で掲載されていた感想⁽¹⁰⁾に対する意見になるが、「これを読んで、なぜ!? と思ったのは私だけではないのだろうか。他のレビューなどを見ても、素晴らしい映画だったというものがほとんど。感情移入して最後に怒りがこみ上げて来て涙が出てきたというレビューもあったほど。しかしこの人は『感情移入が出来なかった』と述べている。なぜそう思ったのか、この言葉はまだ続く。－（中略）－ こういう訳で、この人は感情移入が出来なかったのだ。私には想像することも困難な、非現実的な戦いが今この日本で行われているのだと思うとゾっとしてくる。真実を貫いた人が大変な思いをし、真実か嘘か分からないが、痴漢を認めた人は一日で痴漢騒ぎとおさらばできる。また、痴漢をしてない人が本当だということを実証したくて真実を叫んでも有罪だと決めつけられるという現実と裏腹に、痴漢をする人が一向になくならないという事実も今の日本にあるのだ。そこも含めて、今の日本には様々な問題があふれかえっている。この映画はそのいろいろな日本の問題点を浮き彫りにし、聴衆に考えるという機会を与えるとてもいい映画だと思う。」

本講義を分析すれば、視覚に訴える授業改善として映画やドラマを利用したことが最大の特徴であり、大半の受講生の声によれば「白い巨塔」は素晴らしい教材であった。内容的にも医療過誤訴訟の興味深い具体例を提供してくれるものであり、法学部以外の学部にも所属し、法律を難解であるとして避ける傾向のある学生には、格好の法学系教養科目となったものと推測できる。以上のことは全受講生から送られてきたメールを読めば簡単に判ることであり、全受講生による授業参観プロジェクトの利点である。ただ、時間と労力がかかり過ぎることから毎回実施することは非常に困難であることが難点である。

3 平成21年度の民法における授業改善－不特定多数学生による授業参観プロジェクト

授業改善に有意義なこととして、次の3つがあると考えられる。すなわち、第1に授業研究の専門家に診てもらうことであり、第2にそのような専門家がいなければ公開授業をして参観

(10) 当該学生はYahoo!映画における「それでもボクはやってない」に対するユーザーレビュー (<http://info.movies.yahoo.co.jp:80/userreview/tyem/id325423/rid12/p1/s2/c1/>) を出典として明記し、これを踏まえて感想を述べている。

者を増やし、検討会で意見を交わすことであり、第3に公開授業の実施が困難であれば真面目に受講している学生の意見や感想を聴くことである。これら3つを平成21年度後期に開講した民法〔総則〕と民法〔債権各論〕で実施した。

第1に挙げた点に関しては、授業改善カウンセラーとして元・大阪基督教短期大学教授の日下和信氏にお越しいただきアドバイスを求めた。講義の第一声に注目して分析されたり、「授業は授業者と学習者で創り出すもの」という命題を正しいと考えるならば、「自分の授業の基本的スタンス」というものが出て来るはずである（これ以外にもたくさんの考え方はあっていいし、当然ある）ということを指摘されるなど非常に貴重な経験であった。また、従前の民法では大半をチョーク&トークの形式で講義してきたが、当期の2科目に関しては全面的にパソコンとプロジェクターによる講義に変更した。

第2の公開授業と検討会は、民法〔総則〕は1限に開講したために実施できなかったが、民法〔債権各論〕は4限であり、大半の教員や学生にとって放課後となるため、教員だけでなく、大学院生や受講学生にも検討会に参加してもらい授業検討をすることができた。従って、直接に受講学生の声を聴くことができたわけであるが、学生参加型授業参観プロジェクトでさらに多くの受講学生の意見や感想に触れることができた。平成16～18年は特定の学生に依頼し、平成20年度は全受講生を対象に実施したのに対し、平成21年度後期に民法〔総則〕と民法〔債権各論〕で実施した学生参加型授業参観プロジェクトの特徴は、任意であることを明確にして講義に対する意見や感想を求めたため、不特定多数の学生が対象になった点である。

両科目における実際の受講生数や回答数等のデータは次の通りである。民法〔総則〕に関しては、受講登録者数が221名で、実際の出席者数が120～160名、1回の講義ごとの感想や意見のメールは平均で約15通であった。さらに、メールで6回以上の感想をくれた学生は11名で、紙媒体で6回以上の感想をくれた学生は2名であった。民法〔債権各論〕に関しては、受講登録者数が132名で、実際の出席者数が70～90名、1回の講義ごとの感想や意見のメールは平均で約7通であった。さらに、メールで6回以上の感想をくれた学生は8名であった。大ざっぱに言えば少なくとも5%、多ければ20%の受講生が意見や感想を送ってくれた。また、両科目において、6回以上の感想をくれた学生は、小テスト・最終試験共に非常に良く書けていた。その意味において、学生参加型授業参観プロジェクトは、授業改善に有益であるだけでなく、成績評価において重要な参考資料となるものである。

さらに、受講生は意見や感想だけでなく、質問も送ってくるケースがある。次回の講義の冒頭で、その回答をすれば、前回授業のフィードバックに非常に有効である。従って、講義材料としても非常に有意義であり、その具体的なものとして一例だけ挙げる。「本人Aを無権代理人Bが相続する単独相続の場合、BがAを殺した時等におこる相続欠格に関して、Aの権利がBに相続されないのであれば、契約などはどうなるのでしょうか。また、追認拒否の

とき、信用できないとしてBに相続しないという遺言をAが残していればどうなるのでしょうか。また、共同相続の場合、他の相続人DやEの意見が違ったら、どうなるのでしょうか、多数決になるのでしょうか、それとも裁判沙汰になるのでしょうか？」以上は第11回講義の後で送られてきたメール文の一部であるが、若干の修正をして第12回講義の冒頭での説明材料として使用した。その詳細な内容については省略するが、第12回講義の後、別の受講生から、他の受講生がどのように考えているのかを理解することができて非常に興味深かったという趣旨の感想が送られてきた。

むすびに代えて

学生参加型授業参観プロジェクトは、1回だけ講義を参観した教員による授業への参加・観察という教員参加型授業参観プロジェクトではなく、毎回受講している学生による授業参加・観察プロジェクトを想定しているのであって、毎回受講してくれている学生の任意的な参加と協力が重要である。もし可能であれば既に当該科目を修得した学生であることが望ましい。未修得の学生で、受講登録をして当該科目の単位を取得したい場合、講義者の歓心を得ようとして、授業に対する意見や感想が迎合的になる可能性が高くなるのであって、それでは本来の目的である授業改善につながらないからである。プロジェクト開始当初の具体的な作業として、講義者は、インターネット上で講義者が運営しているホームページに設置した掲示板を通して、講義終了後、講義の狙いや目的、内容、感想などを記載する一方、授業参観プロジェクトに参加している学生は、電子メールで講義者に対して意見や感想を伝えるという手法を採用した。もし、既修得の学生で授業参観プロジェクトに協力してくれる者が見つからない場合には、仕方がないが、受講登録している学生に協力を呼びかけざるを得ない。この場合は、どうしても講義者に対して迎合的になると思われるので、「感じたことを率直に述べて構わないのであって、決して遠慮しないように」と終始訴え続けたつもりである。

そして、学生参加型授業参観プロジェクトは、継続的に当該科目を受講している学生が毎授業後、メールにて意見や感想を率直に言ってくれる点にその特色があり、公開授業とその検討会では、毎回、他の教員が参加することはスケジュール的に非常に困難であって、その難点を克服するものが学生参加型授業参観プロジェクトである。当該プロジェクトに基づく授業改善は、日下和信「解り易い授業」⁽¹¹⁾を念頭に置いて試行したので、日下和信「授業5段階説」を物差しとして、上述した学生参加型授業参観プロジェクトによる法学系科目の授業改善を、分析してみたい。同説によれば、第1段階は伝える授業であり、第2段階は教え込む授業⁽¹³⁾、第3段階は考えさせる授業⁽¹⁴⁾、第4段階は自ら考える授業⁽¹⁵⁾、第5段階は論ずる授業⁽¹⁶⁾とされる。なお、第3段階の考えさせる授業は、答を言わせる授業、資料を調べさせる授業、

(11) 日下和信「解り易い授業をどう構想するか」『神学と人文（大阪キリスト教短期大学紀要）』第47集 2008年

一問一答式で進める授業、手掛かりを吟味してかかる授業、現物・実際の問題から始まる授業という5形態に分類される。当初の特定学生による授業参観プロジェクトでは第2段階の教え込む授業に止まっていた。その次の全受講学生による授業参観プロジェクトを実施した「論理トレーニングと法的思考」では第3段階の考えさせる授業、その中の現物・実際の問題から始まる授業になったものとする。さらに、平成21年度の民法における不特定多数の学生による授業参観プロジェクトでは、様々な受講生が存在するが、積極的に質問をしてくれた学生に関しては第4段階の自ら考える授業に深化しているものと推測できる。第2に、学生参加による大学教育の改善を図るものであるから、大学としての教育・授業の質的向上につながり、授業参観プロジェクトに参加していない一般学生の学びの充実にまで寄与するものでもある。第3に、学生参加型授業参観プロジェクトは学生参画型教育改善の一部を形成するものであり、学生にすべてを任せてしまうという性格のものではなく、学生と教職員と一緒に教育改善・授業改善を議論し推進しようとするものである。第4に、教員集団だけで教育改善が行き詰まりを見せている現実、大学関係者なら誰でも感じていることであり、学生の積極性が授業自体を変革することにつながり、ひいては大学教育をより良い

-
- ✓ (12) 日下和信「授業5段階説」の第1段階は単純な情報伝達を目的とする。理屈抜きで憶えること、約束事などをきちんと、正しく、脱落無く、憶え理解させることがその機能であり、文字・記号体系の学習、言語の習得、各種機械の使用法の説明、技術マニュアルの伝達などに有効であるとされる。この段階において、教える側は、説明に一貫性を持たせて、憶えやすいように、忘れて憶える故に反復を意図的に、関連あるものを一まとめにして提示することが重要である。
 - ✓ (13) 日下和信「授業5段階説」の第2段階は知識の理解を目的とする。短時間に、多くの人に適切な説明を順序良く念入りにして、まとまりのある内容を効率良く理解させることがその機能であり、講演会、一斉授業、ひとまとまりの話を短時間に聞かせる時、取り敢えずの浅い理解が求められる時などに有効であるとされる。この段階において、教える側は、学習者の最低レベルを把握して全員に解る程度から着実に説明を準備し、大局が解りやすいように文脈を練り説明に飛躍がないようにすることが重要である。
 - ✓ (14) 日下和信「授業5段階説」の第3段階は考え方を学ぶことを目的とする。ものの見方、考え方を学び、その後、考える手掛かりを用いて、思考力を付け、同時に、筋道立った論理展開を学ぶことがその機能であり、考え方が分かれる場面、考える枠組みを整理する必要の出た時、考える方向性が問題になった時などに有効であるとされる。この段階では、考えることの実践を示し、客観的議論の進め方・前提条件・考え方のベース（法則）・思考枠などを体得させ、思考力を形成させることが重要である。
 - ✓ (15) 日下和信「授業5段階説」の第4段階は問題解決能力の養成を目的とする。問題意識を持って、問題を発見し、その解決に至る全過程を実地に学び、問題を深めるために、発展的に捉える視点を学ぶことがその機能であり、調査・研究の必要な時、問題解決の場面、能力開発などあらゆる場面に有効であるとされる。この段階において、教える側は、科学的論理展開の下に実際の問題に多様なアプローチをするように援助し、脇役として振る舞いながらも常に学習者の状況を厳しくチェックすることが重要である。
 - ✓ (16) 日下和信「授業5段階説」の第5段階は万人に話を聞かせることを目的とする。意見の対立する者、利害の反する者等、聞く耳を持たないような人間に対しても、素直に成らせて、取り敢えず話を聞かせられることがその機能であり、敵対的・反抗的な学習者に対して論ずる時、自暴自棄の場面で立ち直らせる時、確信している考え方を伝えさせようとする時などに有効であるとされる。この段階において、教える側は、本物人間であることが必須条件であり、人格的迫力で聴衆を敬服（威圧）させるパワーがあり、ゆっくりと穏やかに話し、真実の説得力を持ち、さらに聴衆の立場に理解を持っていることが重要である。

方向に導くのだという意識を持つことは極めて重要なことである。近年は、教員だけがFDに取り組むというのではなく、講義の受け手である学生が参加してこそ効果的ではないかと考えられるようになってきており、とりわけ、岡山大学や立命館大学で展開されている学生参画型FDは脚光を浴びている。大学の構成員全体が深い関心を寄せる形での授業改善は、大学の組織としての教育改善をより一層推進しやすい方向へ導いてくれるものである。

最後に、FD活動としての学生参加型授業参観プロジェクトは、授業改善のためにする、熱心な受講生の活用である。そして、授業改善を図るにあたり、上述したように、公開授業とその検討会は極めて効果的であるが、具体的な運用面・実行に当たっての可能性・難易度等を考慮すれば、授業改善に取り組むに当たって学生参加型の授業参観プロジェクトがもたらす効果ならびに有益性は公開授業とその検討会に勝るとも劣らないものであると考える。

【付記】

本稿は、平成21～23年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「学生参加型授業参観プロジェクトによる授業改善」（課題番号：21500937）の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- 京都大学高等教育教授システム開発センター編『開かれた大学授業をめざして—京都大学公開実験授業の一年間』玉川大学出版部，1997年
- 京都大学高等教育教授システム開発センター編『大学授業のフィールドワーカー—京都大学公開実験授業』玉川大学出版部，2001年
- 京都大学高等教育教授システム開発センター編『大学授業研究の構想—過去から未来へ』東信堂，2002年
- 清水亮・橋本勝・松本美奈『学生と変える大学教育 FDを楽しむという発想』ナカニシヤ出版，2009年
- 田中毎実・大山泰宏・石村雅雄・溝上慎一「共同研究/京都大学における公開実験授業の成果と課題」『大学教育学会誌』20巻2号，1998年
- 田中毎実ほか「平成12年度公開実験授業の記録」『京都大学高等教育叢書10』，2001年
- 溝上慎一『大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ！』，2006年
- 吉田雅章「FD活動と『PL法』」『経済理論』295号，2000年
- 吉田雅章「和歌山大学におけるFDの実践報告」『京都大学高等教育研究第6号』，2000年
- 吉田雅章「公開授業『日々のくらしと法律』と授業改善」『メディア教育開発センター研究報告第21号』，2001年
- 吉田雅章「法学教養科目における授業改善」『経済理論』302号，2001年
- 吉田雅章「組織のFD活動と個人の授業改善」『京都大学高等教育研究第7号』，2001年
- 吉田雅章「和歌山大学における公開授業」『京都大学高等教育研究第8号』，2002年